

フェルディナン・ド・ソシュールの外的言語学

—社会言語学的考察の試み—

佐藤 圭一郎

1. はじめに

『一般言語学講義¹⁾』(以下、『講義』と略記)は、フェルディナン・ド・ソシュール(1857-1913)の没後の1916年に出版された。ラングとパロール、共時態と通時態といった新たな視点で語られた言語論は多くの人々を魅了した。その影響は構造主義と呼ばれ、大きな潮流を引き起こした。言語学における構造主義は、言語の音素構造と統辞法が中心であった。しかし、その一方で言語と当時の政治的状況や、職業や年齢、性別といった社会的な要素を言語研究の対象にすることは、ほとんど見られなかった。そのため社会的要素と言語の関係を中心に置いた言語研究の創設に向けた動きが出てくる。その流れの中で、構造主義を否定しつつ、言語と社会的な要素を関係づけて論じる社会言語学と呼ばれる学問領域が誕生した。本論では、まず社会言語学者によるソシュール批判をまとめる。次に『講義』とそのもととなった学生のノートを確認しつつ、ソシュールによって言語と社会的要素を関連付けて論じられた外的言語学に焦点を絞って論じる。最後に1996年に発見されたソシュールの草稿を参照しつつ、ソシュールにおける内的言語学と外的言語学的位置づけについて扱い、現代の社会言語学への繋がりについても考察する。

2. 社会言語学者からみたソシュール

2.1. ウィリアム・ラボフによるソシュール言語学批判

社会言語学の創始者のひとりにウィリアム・ラボフ(1927-)が挙げられる。代表的な研究は、マーザズ・ヴィニヤード島とニューヨークにおける研究である。前者の研究においては、その島の発音とアメリカ大陸で使用されている発音を比較し、島の人々が自身のアイデンティティを守るために島特有の発音を保持していると考察している。もうひとつのニューヨークの研究は英語の /r/ の発音に焦点を絞ったものである。ラボフはこの /r/ の発音と社会的・経済的階級を関連付けて調査を行った。その結果、社会的階級が高い人々と、母音の後ろの /r/ の発音は正の相関関係がみられた。

このようにアイデンティティや社会階層と言語を関係づけて論じたラボフは、ソシュールとソシュールの『講義』に影響を受けた研究者(以下、ソシュール支持者と記述する)に対して、次のように述べている。

ソシュールは言語学を「社会的・生活内の記号の生命を研究する学問」のひとつとみなしていた。しかし、十分に奇妙なことであるが、ソシュール支持者の慣例（これには大多数を含む）においては、社会的・生活が全く扱われていない。[……] 事実、ソシュールの記述を掘り下げて調べれば、彼にとって「社会的」という語は単に「複数の個人」を意味しており、社会相互作用というより広い意味合いを示唆するものではないことが明らかになる²⁾。

すなわち、ラボフはソシュールの「社会的」という言葉が「個人の集合」の意味しか持っていないこと、そしてソシュール支持者たちが社会的側面を考慮していないことを批判している。言語を話す集団の社会的状況を考慮した言語研究を行っていたラボフが、ソシュールの「社会的」という言葉の範囲の狭さに疑問を投げかけるのは、当然のように思われる。

2.2. カルヴェのソシュール言語学批判

ソシュールの言語と社会に関する考察に対して批判しているのは、ラボフだけではない。そのひとりにフランスを代表する社会言語学者のルイ＝ジャン・カルヴェ(1942-)が挙げられる。カルヴェは1967年に『講義』の「あとがき」を記しており、その「あとがき」にてカルヴェは、ソシュール以後の言語研究の二つの流れについて説明している。ひとつはノーム・チョムスキー(1928-)が代表する生成文法学派の流れであり、その研究領域は統語論、音韻論、意味論を中心としたものであった。もう一つの流れは記号学、社会言語学、心理言語学、民族言語学などの流れであり、カルヴェは次のように述べている。

しかし、同じくして、この3つの言語研究とは別に、ほかの研究の方向が表れてくる。記号学、社会言語学、心理言語学、民族言語学などは初めから言語学に組み込まれていたが、付属的な研究法で、教科書の最後の章にあり、大学のカリキュラムでは二義的な講義であった。しかしそれらは構造的な囲いから徐々に自由になり、独自のモデル、すなわち統合されたひとつの科学の概念へと分割されるだろう。というのも、これらの新しい研究は[……] パロールに対するラングの優位について徐々に疑問を投げかけるようになるからである。そのことによって、ソシュールとともに生まれた言語学と、その言語学が少なくともコミュニケーションにおけるふたつの基本的要素を抑圧していることに疑問が投げかけられた。そのふたつの基本的要素とは、すなわち個人と社会である³⁾。

ここでカルヴェはコミュニケーションの二つの基本的要素である個人と社会に焦点が当たることで、社会言語学や民族言語学などのそれまでは二次的な研究とされてきた学問領域が確立されると述べている。この指摘はカルヴェもラボフと同様に、ソシユー

ル言語学における社会の扱い方に批判を加えているだけでなく、20世紀後半に社会言語学が言語学の一領域として確立していくことを示唆するものである。

2.3. ラボフとカルヴェ，そして外的言語学

ラボフとカルヴェは、言語に対する社会的考察が抜け落ちている点で、ソーシャルとソーシャル支持者を批判している。具体的には、ラボフはソーシャルの言語を話す集団に対しての社会的考察が欠けていた点に対して、カルヴェはソーシャル言語学において、コミュニケーションの基本的要素である個人と社会の側面への考察を批判している。ソーシャルはともかく、ソーシャル支持者の言語に対する社会的考察が抜け落ちてしまった理由のひとつに、ソーシャル支持者の多くは、『講義』における最後の一文、すなわち「言語学は言語それ自体において、そしてそれ自体のために考察されたラングを唯一かつ真の対象とする⁴⁾」に影響を受け、言語学の焦点を絞り過ぎてきたことが挙げられるのではないだろうか。確かに『講義』における最後の一文に忠実に従えば、ソーシャル言語学で言語と政治史や言語と歴史といった言語研究以外の要素は排除されよう。しかし、エングラ（1968）⁵⁾、ブケ（2012）⁶⁾の研究によって、『講義』の最後の一文が編者たちによって付け加えられたことが明らかになった。このことは絶対的な価値を有しているとされてきた内的言語学に疑問を投げかけ、これまでほとんど言及されてこなかったソーシャルの外的言語学について再考察の必要性を促すものではないだろうか。実際にソーシャルは『講義』のなかで、内的言語学と外的言語学を分けて論じているが、これまでの研究において外的言語学についての考察はほとんどなされてこなかったように思われる。そこで本論文ではソーシャルの外的言語学に焦点を絞って考察を試みる。

3. ソシールの外的言語学

3.1. 内的言語学と外的言語学

ソーシャルの外的言語学を論じていくにあたって、まず内的言語学と外的言語学のそれぞれがどのようなものかを確認したい。ソーシャルは『講義』において言語学における「内的」と「外的」を区別するためにチェスの例を用いている。

チェスにおいて、外的なものとの内的なものを区別することは比較的容易である。チェスがベルシャからヨーロッパに伝わったという事実は外的な領域であり、逆に、体系と規則に関することの全てが内的な領域である。たとえ私が木製のコマを象牙のコマに取り換えたとしても、その変化は体系にとって何の関係もない。しかし、わたしがコマの数を減らしたり増やしたりしたら、この変化はゲームの「文法」に非常に大きな影響を及ぼす。[……] 多少なりとも体系を変化させるあらゆるものは内的である⁷⁾。

ソシュールにとって「内的」とは体系と規則に関するものであり、体系を変化させるものが内的言語学に属する。したがって、「外的」とは、言語の価値を変化させず、言語内の体系に影響を及ぼさないものと定義することができる。そして、内的言語学と外的言語学を比較した場合、内的言語学は言語内の体系を変化させるものとして、外的言語学よりも高い価値を与えられてきた。確かにソシュールは内的言語学への研究の道を切り開こうと外的言語学について否定的な捉え方をしていたのかもしれない。しかし、ソシュールは外的言語学が不必要な領域とは考えていなかった。

3.2. 『講義』における外的言語学の位置づけ

ソシュールは『講義』のなかで外的言語学について次のように述べている。

われわれのラングの定義は、われわれがその組織や体系とはまったく無関係なもの、一言で表すならば「外的言語学」の語で表されるものを、全て取り除くことを前提としている。しかしながら、この言語学も重要な事柄を対象にしており、ひとつひとつがランゲージュの研究に取り掛かるときに考えるものは、とりわけこの重要な事柄である⁸⁾。

確かにソシュールは『講義』において外的言語学を「言語 *langue*」の対象から除外している。エングラール版で確認すると、リードランジェ、ブーシャルディ、ゴートイエ、コンスタンタンの4名が引用と同じ内容の講義ノートを残しており、ソシュールがラングの考察に外的言語学を含めなかったことに編者の介入はないように思われる⁹⁾。しかし、ソシュールは言語研究において外的言語学を完全に排除すべきものとは考えていない。むしろ、ランゲージュの研究においては必要な事柄と述べている。事実、『講義』の豊富な校注によって、多くのソシュール研究者が参照している通称マウロ版を作り上げた、イタリアを代表する言語学者のひとりトゥリオ・デ・マウロ (1932-2017) は、その『講義』の注釈において、リードランジェの講義ノートを引用しつつ、次のように述べている。

「すなわち、外的言語学の定義は、ラングの体系に立ち入ることがないあらゆるラングに関するものである。人々は外的言語学について論じることができるのだろうか。もし人々になんらかのためらいがあるならば、言語における内的研究と外的研究と言ってもよい。外的側面に含まれるもの、それは歴史と外的な記述である。この側面には重要な諸事実が含まれている。言語学という言葉は、特にこの諸事実全体の概念を想起させる。」

このように、ラングの外的研究はソシュールにとって言語学の重要な分野である。なぜならば、外的な諸要因はラングを作り上げる上で重要な関わりを持つからである¹⁰⁾。

外的言語学は当該言語の歴史といった外的な諸要素をその研究対象とする。しかし、それらは「ラングの体系」に対して影響を及ぼさない。ここで述べられている「ラングの体系」とは、言語記号におけるシニフィアンとシニフィエ、任意の語における連合関係、連辞関係といった内的言語学で扱った内容のことを指している。ソシュールは言語記号の成立を、言語記号同士の対立によって成り立つと考えていた。例えば「redouter, craindre, avoir peur」のような同義語は、それらの対立によってのみ固有の価値を持っており、もしredouterが存在しなかったら、その全ての意味内容はそれらと対立するものへと移るだろう¹¹⁾とソシュールは述べている。言語と歴史の関係は、このような「ラングの体系」に影響を及ぼさない。しかし、ラングの構成過程を把握するためには、当該言語の歴史の考察が不可欠であるとソシュールは考えていたのではないだろうか。

3.3. 外的言語学の研究範囲

前節でソシュールが外的言語学において、言語の歴史、そして言語に関係性を持ちつつも体系内の価値には関わらない諸要素を研究対象としていたことが確認できた。それでは具体的にどういったものを対象としていたのだろうか。ソシュールは外的言語学について、次の4つの領域を想定していた¹²⁾。

第一に言語学が民俗学と関わる全ての点、すなわち一つの言語の歴史と、一つの人種または文明の歴史の間に存在しうる全ての関係である。これら二つの歴史は互いに混ざり合い、そして相互関係を保つ。[……。]。ある国民の風習はその国民の言語に影響を及ぼし、一方で、国民という概念を作るものは、まさに多くの場合で言語である。[……。]

第二に、言語と政治史の間に存在する関係について言及しなければならない。歴史上の重大事件、例えばローマの征服などは、多数の歴史的事実に対して甚大な影響を及ぼした。征服の一形式にすぎない植民地化は、ある固有語を様々な環境に運び込み、この特有語（イディオム）に変化をもたらす。

[……。] 高度の文明は、ある種の専門用語（法律語、学術用語など）の発達をうながす。ここで、われわれは第三の点に達する。それは言語と、教会、学校などのあらゆる種類の制度との諸関係である。制度の側からみても、これらは言語の文学的な発達と密接に結びついており、この現象は一般的であるだけに、政治史とも不可分に結びついている [……。]。

最後に諸言語の地理的な広がりと言言の分化に関係するすべてのものは外的言語学に属する。おそらく、外的言語学と内的言語学の区別が最も逆説的に見えるのは、まさにこの点においてである。それは地理的な現象はあらゆる言語の存在と密接に結びついているからである。しかし、現実において、地理的な現象が固有語の内的な組織に関係することはない。

つまり、ソシュールが外的言語学を含めていた4つの領域は、言語と歴史、言語と政治、言語と制度、そして言語地理学の領域である。この4つの領域の内では、社会言語学者から見たソシュールの批判への反論として挙げられるのは、2番目の言語と政治の関係である。なぜならば、ソシュールはそこで植民地化による「特有語」への影響について考察しており、これは社会言語学的考察と言えるからである。

3. 4. 社会的要因による「特有語 idiom」への影響

ソシュールは『講義』において「特有語」を次のように考えている。

「特有語 idiom」という用語は、ある集団の固有の特徴を反映しているものとしてのラングを非常に正確に表すものである（ギリシャ語の *idiōma* はかつて「特別な風習」を意味していた）。この考えは正しいが、肌の色あるいは頭の形といったのと同様に、そのラングに国の属性だけではなく、人種の属性を見るまでになると誤った考えになる¹³⁾。

ここで言う「集団の固有の特徴」とは、具体的には衣服や武具などといった集団における「風習 *habitude*」のことである。しかし、言語がある集団の社会的特徴を反映していることは認めても、話している言葉からそれが属している国の特徴を判断する、あるいはその国の人々がどのような人物かを判断することはできない。ソシュールは「特有語」をこのように考えていた。そして「特有語」の考察に続いて、ソシュールは、ふたつの「特有語」が同じ場所で混同されず共存している状況について検討している。

まず、新しい住民の言語が、原住民の言語の上に重なり合ってくることがある。例えば南アフリカにおいて、いくつかの黒人の方言があるのと同時に、相次ぐ2度の植民地化の結果として、オランダ語と英語の存在が確認される。[……] これらの言語は常に完全に混ざり合っているものではない。ある任意の地域において、ふたつの言語の共存は社会の領域分類と両立する。例えば、二つの言語のうち一つは都市部で話され、もうひとつは農村部で話されるということがある。しかし、この分類は常に明確であるわけではない。[……] 非常に多くの場合、このような言語の重なり合いは、より大きい軍事力をもった民族の侵略によって引き起こされてきた¹⁴⁾。

ソシュールは、植民地政策によって現地語とオランダ語や英語が併存する二言語併存の状態があり、それは軍事力が勝った民族の侵略によって引き起こされたことを考察している。また二つの言語の併存状況において、ひとつは都市部で話され、もうひとつは農村部で話されるといったダイグロシアの状況についても言及している。ソシュールは言語と社会的要素の関係についての考察を加えているだけではなく、現代の社会言語学の

領域のひとつであるダイグロシアの状況についても言及していたのである。

4 ソシュールの外的言語学の位置付けと現代社会言語学への貢献

4. 1. ソシュールにおける外的言語学の位置づけ

ここまで、ソシュールが内的言語学と外的言語学、そのどちらも重要視していたこと、そして、外的言語学の領域のひとつに現代の社会言語学に通じる考察が含まれていることを明らかにしてきた。それではソシュールは内的言語学と外的言語学、そのどちらも同じ割合で重要視していたかと言えばそうではない。そこには優先度が存在していた。1996年に発見されたソシュールの草稿群の中に、「四つの観点」と題された手稿があり、その中で優先度について述べている¹⁵⁾。

1. それ自体におけるラングの状態の観点

- 瞬間的な観点に他ならない
- 記号学的（あるいは記号-観念）な観点に他ならない
- 非歴史的意味の観点に他ならない
- 形態論的あるいは文法的な観点に他ならない
- 複合的な要素の観点に他ならない

（この領域の独自性は意味と記号の関係、あるいは記号同士の関係によって確かなものとなる）[……]

4. 連続する二つのラング状態のそれぞれをそれ自体として扱いつつ、その定着における〈歴史的〉観点。まず片方をもう片方に従属させることはせずに説明を行う。

四つの観点の中で第一の観点と第四の観点は、それぞれ内的言語学と外的言語学と重なるように思える。なぜならば内的言語学と外的言語学の違いのひとつに、言語と歴史の観点を含むか否かが挙げられ、それに対応するように第一と第四の観点における最大の違いは、歴史的観点を含めるか含めないかに拠るところが大きいからである。また第四の観点における二つのラングの併存状態は、ソシュールによる「特有語」の考察において同様の状態について論じていることから外的言語学との類似性が認められる。また第一の観点は、「言語それ自体におけるラングの状態」についての観点であり、その内容は「瞬間的」や意味と記号の関係に関するもの、つまりは「ラングの体系」に関係することから内的言語学との類似性が認められる。

そして、ソシュールは続けて「実際に、四つ目は一つ目の観点「が研究された¹⁶⁾」日に、はじめて有益になるだろう¹⁷⁾」とそれらの優先度を記している。つまり第一の観点における言語研究が行われることによって、第四の観点的言語研究が実りの多いものになる。言い換えると内的言語学が確立され、その研究が十分なものになったときに、初めて外的言語学も実りの多い研究領域になるだろうとソシュールは考えていたと言える。

4. 2. ソシユールの外的言語学と現代の社会言語学

ソシユールの内的言語学の探求を経た、外的言語学の研究への移行という考え方は、現代の社会言語学の研究において十分に価値があるように思われる。社会言語学のひとつの領域に言語接触がある。アメリカの言語学者で文法化の大家のひとりジョアン・バイビー (1945-) は、言語接触による言語変化を研究するにあたって、少なくとも次の6つの条件に応える必要があるとして、その研究領域の困難さを指摘している¹⁸⁾。その6つの条件とは、1. 言語干渉によって生じたとされる特徴が接触以前には存在しなかったことを示すこと。2. 言語変化発生時、二言語使用の環境が広く存在していたことを示すこと。3. 接触する二言語の言語体系を比較し、干渉する側の言語が、その言語からの干渉によって、もう一方の言語に生じたとされる特徴を持っていること。4. ある変化について、内的要因による可能な説明を考え、外的な影響がなくてもその変化が起りえたかを考えること。5. ふたつの言語構文を比較し、実際に同じ属性をもっているかどうかを示すこと。6. 接触によってもたらされた変化は二言語使用者である個人のなかで起こるものであり、妥当な認知メカニズムが立証される必要があることである。この中で特にソシユールの考え方と類似するものは4番目の指摘と思われる。

バイビーは4の具体的説明として、基本的にドイツ語において未来形は、動詞 werden (～になる) に不定詞を組み合わせるが、アメリカのペンシルバニア州で話されるドイツ語では動詞 geh (行く) を使って直近の未来を表す形式が発達している例を挙げている。彼女は「英語にも go を用いた未来形 (go-future) が存在しているため、それは借用の事例と考えられるかもしれない¹⁹⁾」と譲歩しつつも、「go を用いて未来を表す形式は世界の言語において非常に一般的であるため、これは単に言語の内的な要因による発達かもしれない」と文法化による説明を試みている。このように言語変化を説明するにあたって、言語接触と文法化の二つの側面からの考察が可能である。ソシユールの内的言語学と外的言語学の明確な区別は、この二つの必要性を先取するような主張だったのではないだろうか。

結論

本論では、ソシユールの外的言語学を考察してきた。その結果、ソシユールは内的言語学と外的言語学の両者を重視していたこと、外的言語学概念において社会言語学に繋がる考察していたこと、外的言語学の研究を豊かにするためには内的言語学概念の確立と発展の必要性を説いていることの3点が明らかになった。

社会言語学者のラボフやカルヴェは、ソシユールが言語への社会的考察が抜け落ちている点について批判していた。しかし、『講義』の基となった学生のノートではもちろんのこと、『講義』においてすら、ソシユールは外的言語学の領域で言語と社会的要因の関係性について論じており、さらにはその重要性を認めている。確かに、そこにはラボフのような具体的な研究は見られないが、ソシユールは言語接触やダイグロシアと

いった現代の社会言語学において議論されている主題について言及しており、その観点は現代の社会言語学の考察においても有効と言えるのではないだろうか。

(東北大学大学院文学研究科博士前期課程)

註

- ¹⁾ Ferdinand de SAUSSURE, *Cours de Linguistique générale*, édition critique préparée par T. de Mauro, Payot, 1995 (以下引用時に *CLG* と略記する)。
- ²⁾ William LABOV, *Sociolinguistic Patterns*, University of Pennsylvania Press, 1972, p. 185.
- ³⁾ Louis-Jean CALVET, *Lire Saussure aujourd'hui*, postface au *CLG*, Payot, 1995, p. 512.
- ⁴⁾ *CLG*, p. 317.
- ⁵⁾ Ferdinand de SAUSSURE, *Cours de Linguistique générale*, édition critique par Rudolf Engler, Wiesbaden, Otto Harrarowitz, 1967-68 (以下 *CLG/E* と略記し、本論においては「エンゲラー版」と略記する)。
- ⁶⁾ Simon BOUQUET, « Principes d'une linguistique de l'interprétation : une épistémologie néosaussurienne », *Langage*, n° 185, 2012, pp. 21-33.
- ⁷⁾ *CLG*, p. 43.
- ⁸⁾ *CLG*, p. 40.
- ⁹⁾ *CLG/E*, pp. 58-59.
- ¹⁰⁾ *CLG*, p. 428.
- ¹¹⁾ *CLG*, p. 160.
- ¹²⁾ *CLG*, pp. 40-41.
- ¹³⁾ *CLG*, p. 261.
- ¹⁴⁾ *CLG*, pp. 265-267.
- ¹⁵⁾ Ferdinand de SAUSSURE, *Écrits de Linguistique générale*, textes établis et édités par Simon Bouquet et Rudolf Engler, Gallimard, 2002, pp. 21-22 (日本語訳は、フェルディナン・ド・ソシュール『自筆草稿『言語の科学』』松澤和宏訳、岩波書店、2013, pp. 12-14 を参考にした。また紙幅の関係上、第二と第三の観点については省略した)。
- ¹⁶⁾ 同。 « De fait, le quatrième ne pourra l'être fructueusement que le jour où le premier []. » となっており、草稿において premier 以降が空白となっている。その空白部分の解釈として松澤和宏訳の訳注における「[が研究された]と補うことができよう」を参考にした。
- ¹⁷⁾ 同。
- ¹⁸⁾ Joan BYBEE, *Language Change*, Cambridge University Press, 2015, pp. 249-250 (日本語訳は小川芳樹・柴崎礼士郎訳『言語はどのように変化するのか』、開拓社、2019, pp. 350-352 を参考にした)。
- ¹⁹⁾ 同。

La linguistique externe de F. de Saussure —Une entreprise d’approche sociolinguistique—

Keiichiro SATO

Après la mort de Ferdinand de Saussure (1857-1913), un ouvrage intitulé *Cours de linguistique générale* est publié par Charles Bally et Albert Sechehaye en 1916. Ce livre, qui a retenu l’attention de nombre de chercheurs, a introduit de nombreuses notions nouvelles, langue-parole, diachronie-synchronie, signifié-signifiant notamment. La dernière phrase de l’ouvrage, « la linguistique a pour unique et véritable objet la langue envisagée en elle-même et pour elle-même », a eu la plus grande influence dans le monde entier. Par son influence, Saussure est considéré comme un des fondateurs du structuralisme. La plupart des saussuriens ont étudié la langue dans ce contexte et pour cette raison ont été moins sensibles aux relations entre la langue et le social. Dans les années 1960, une nouvelle manière d’aborder la linguistique apparaît. C’est la sociolinguistique. William Labov, un des fondateurs de la sociolinguistique, critique les saussuriens car selon lui « ils ne s’occupent nullement de la vie sociale : ils travaillent dans leur bureau avec une ou deux informations, ou bien examinent ce qu’ils savent eux-mêmes de la langue ».

Dans cet article, je me pencherai en premier lieu sur les critiques émises par les sociolinguistes à l’égard de la linguistique de Saussure et des saussuriens. J’aborderai ensuite la linguistique externe que la plupart des saussuriens n’envisagent pas. Pourtant Saussure fait référence aux relations entre la langue et les faits sociaux. Il est certain que Saussure était conscient de l’influence de facteurs sociaux sur les langues. Grâce aux manuscrits de Saussure découverts en 1996, on peut savoir dans quel ordre il souhaitait que l’on étudie la langue : il souhaitait d’abord élaborer une manière d’étudier la langue elle-même, puis envisager une linguistique externe, qui a des relations avec la sociolinguistique.

Mots clés : Ferdinand de Saussure, linguistique externe, sociolinguistique.